

# これからの日本に必要な 言葉の教育

## 「言語技術」の有効性

平成22年4月21日

三森ゆりか氏

(つくば言語技術教育研究所)



### 自己紹介

今日は、私が20年間やってきたことを中心にお話しします。取組を始めたのは、中学、高校時代に新聞社の特派員だった父が西ドイツに赴任していたために、ドイツの学校に通ったのがきっかけです。日本では一応文学少女でしたし、作文も得意だったのですが、その国語力が全くドイツで通用しないということを思い知らされました。そこで、日本の国語教育を変えないとドイツには追いつかない、ほかの国にも追いつかないと感じたのです。そして、せめて自分の子どもだけは何とかしたいと思ったのがきっかけでした。

### 日本の母語教育の問題点

今の日本の母語教育は、日本語が特殊というところから始まり、他の言語とは言葉そのものが違うのだから国語教育はこれでいいという意見が非常に多いです。その結果、国語教育は、漢字と、あと試験の回答力のための教育が中心です。

加えて、母語教育はすべての学問や社会、生活の要であるという認識が薄弱で、時間数も少なく、母語教育の位置づけがほかの国に比べて非常に弱いのです。中学までは5時間ありますが、高校になると古典の時間が多く、現代文は数時間のみの実施という状況です。さらに、限られた現代文の時間も、大学入試のための問題演習が主で、社会で使うための母語の教育をほとんどしていない。この傾向は特に進学校で顕著です。言葉を技術としてとらえる感覚が欠如しているために、議論や作文、読むことの方法論をほとんど教えないで社会にほうり出してしまうのが実情です。

まず母語教育としてのグランドデザインがないのが問題です。その結果、小学校から高校卒業までの12年間を包括した体系的なカリキュラムがありません。さらに現状のカリキュラムには双方向の対話が位置づけられておらず、作文の訓練もなされない、クリティカル・シンキング(批判的思考)もきちんと教えていないという、ないない尽くしで、子どもを世の中に出してしまっているという状況です。今、日本の社会が抱えているさまざまな問題は、例えば「ひきこもり」というのは国際用語になっていますが、こういう問題でさえ、実は教育の問題ではないかと私自身は考えています。

このような「国語」教育の結果、大学はレジャーランド化し、学問のできない大学生が多く生まれます。そして、即戦力にならない学生が企業に入るため、最近は私のところに企業研修の依頼が増えているのです。国際社会での競争力は英語の問題といわれますが、実は英語ではなくて母語力の問題であるというふうに私は捉えています。

#### 日本の教育に必要なこと

私は、これからの日本の教育に、言語技術教育が必要だと考えています。これは、ロシアを含めたヨーロッパ全域から、北米・南米、オセアニア、アジアの英語圏、それから中近東やアフリカ諸国のエリート教育などで実施されている母語教育で、その内容はほとんど同じです。つまり、言語技術はグローバルスタンダードの母語教育なのです。

このグローバルスタンダードの母語教育は、どういうふうに説得すれば相手が納得するのか、どんなふうに交渉すれば自分たちにとって有利に議論を運んでいけるのかといった方法論、つまり、レトリックや弁証法、論理学といったところから出発しています。これは、ギリシャ・ローマの文化が広がるのに伴い広がっていった教育で、そのために現在、どの国でもほぼ同じような内容の母語教育が行われています。しかし、日本は入っていないのです。

その結果、例えば大手企業のインターンシップに参加した学生の話によれば、グループで問題解決をする課題が与えられても、皆が一方向的に自分の意見を言うだけでちっとも絡んだ議論にならず、結局一晩かかってもうまい解決策が見つけれないということが起こります。これはお互いに議論の方法論を共有していないことが原因です。

あるいは、理系の研究者の話ですが、論文の査読をしていて、理系の研究者の抱える問題が実は母語の言語力にあることに気づかされることが多いそうです。言葉で論理的に考えられないために実験の道筋を考えられず、結局まともな研究論文が書けないために、結果も評価されない。理系にこそ母語教育が必要だということです。

一方、世界の母語教育は、先ほど紹介したように、言語技術（Language arts）という大きなデザインの中で組み立てられています。その内容は、情報を取り込む（聞く・読む）、考える、表す（話す・書く）に分けられます。ここでは、与えられた情報を大きな批判的思考という枠組みの中で議論をしながら、論理的に、分析的に、あるいは複眼的・多角的に考えるという方法を身に付けるものです。その上で創造的に自分なりの意見を考えるということが非常に重視されます。さらに、考えたことをどのように話すのか、どのように書くのか、という方法論もきちんと教わります。つまり、読むための方法論、考えるための方法論、議論のための方法論、そして話すため、書くための方法論を発達段階に応じて、スキルの訓練をしながら積み上げていきます。その最終的な目的というのは人間形成にあります。

どのような人間を形成したいかという、目標とするのは、自立してクリティカル・シンキングができること、考えたことを今度は口頭や記述で自在に表現ができること、そして、最も重視しているのが自国の文化に誇りを持つ教養のある国民を育成することです。これが言語技術（Language arts）の最終目標であるといえます。

「言語技術」は華道に例えると理解しやすくなります。華道はまさに型ですが、これが

身に付くと芸術になっていきます。言語技術も同じような発想です。いろいろな型を教える中で、それが身に付くと最終的には自在に働く芸術になっていくということです。

これからの日本に必要な言葉の教育は、今は国語だけを教えています。ここに言語技術を交える必要があります。欧米や世界各国で行われている言語技術（Language arts）と共通の基盤を持つことで、国際交渉は非常にやりやすくなります。また、国際的な必要性だけではなく、企業で働く際にも、言語技術の能力のない社員は、働くことができないはずで

ます。もう一度、世界の言語教育と日本の教育の何が一番違うかという、世界で一般的なものは、問題解決型の教育です。解決するためのプロセスがあり、そのプロセスを自分たちの頭で考えさせる、これが中心になっています。一方、残念ながら日本の場合は、問題があったら正解があり、多くの場合選択式で、4つのうちの1つの正解を選ぶというものです。それが正解なのかどうかわからなくても、とにかく正解として選ばなければいけない。こういう教育を積み重ねている限り、だれも自分の頭で考えるようにはなりません。受験に勝ち抜くためには、いかに正解を見つけるか、に終始することになります。

### 自身の具体的な取組

学校教育の中にこういうことが入るとは考えられなかったので、自分の子どもたちを教えるために塾という形で私は教えることを始めました。そのため私のメソッドは、週にたった1回しかできない中でどうやって効率よく教えるかというところに特色があります。全体的な構想としては、最終的には、論理的、クリティカルに考え、鑑賞ができ情緒がある人を育てることを目標に、対話や説明、分析、論証、物語、といったことを教えています。

その中でも一番重要なのがクリティカル・シンキングです。クリティカル・シンキングというのは、対象をただ眺めるだけでなく、観察し、情報を分解して、自分なりに分析しながら証拠を事実の中から取り上げていくというものです。そして、その証拠を統合して解釈をして、その上に自分の考えを載せるという、その一連の流れのことをいいます。日本ではこれはビジネス用語ですが、欧米では幼児からクリティカル・シンキングの教育が始まります。子どもたちにいかに自分の目で観察させ、自分の頭で理由を考えさせて、自分たちなりの解決を見つけさせるかというのがこのクリティカル・シンキングの教育で、ここが一番重視されているところです。

そのためには、まず対話の訓練から始めます。日本では、例えば「あなたはサッカー好きですか」と聞くと、返ってくるのは「微妙」というような答えが返ってきます。よくても「うん、好きだよ」という返事です。そして「なぜ好きなの」と聞くと、「うーん、わからない、考えたことないから」という調子なのです。これですと、ここから先に行きません。言語技術教育というのは議論を中心に据えて進めていきますので、必ずきちんと対話ができないと議論になりません。そのために考えたのが問答ゲームというもので、まずはこの方法を用いて対話の方法論を教えています。

ここで大事なものは、単に一問一答で終わらせるのではなくて、「なぜ」を中心に5W1Hを有効に使いながら数回畳みかけていくということなのですが、問答ゲームをやってみ

て1つはっきりしたことが出てきました。それは子どもたちが質問されてもキレなくなる、動じなくなるということです。議論の教育というと、自分の意見を言えるようになるというように言われますが、私は、自分の意見を言えるようになることよりも、人の意見を受け入れられるようになるということと、否定されても落ち込んだりキレたりしなくなることの方が大事だと思っています。この問答ゲームでそれが培われるのです。

この問答ゲームは授業全体に使っていきます。他に作文技術のトレーニングも重要ですが、今日は本を読む技術を中心に説明します。

(Story Structure：物語の構造)

本を読むために、物語には基本的な構造というのがあります。これは英語ではStory Structureと言われています。日本でも山場とかクライマックスということは習いますが、山場やクライマックスが一体どういうふうに絡み合っただけで物語がきちんと構成されるかということについては、意外と習っていません。実は物語にはきちんと構造があります。一番当てはまるのは昔話です。まず冒頭で主人公の設定条件がなされると、次の発端の敵が登場します。主人公はその敵との問題を解決するために旅に出て、短い物語だと基本的に3回危機に見舞われます。そして、クライマックスで敵に勝って結末を迎えるという構成になっています。この構成が理解できると、例えばプレゼンテーションにも活用することができます。物語というのは一番人の耳に心地よく響く形なので、プレゼンテーションにも使わない手はないということです。

(Point of View：視点を変える技術)

もう1つ、物語の中で教えているのは視点を変える技術です。例えば『赤ずきん』の話は普通三人称の客観的な視点で語られています。「昔々あるところに赤ずきんちゃんがありました」という形です。これを赤ずきんの一人称で語り直すと、オオカミが心の中で考えたことは赤ずきんにはわからないし、あるいは赤ずきんがいない場所でオオカミがやったことは赤ずきんにはわからないということになります。赤ずきんの立場からは見聞きできないことを外して物語を語り直すと、相当に違った話になります。この訓練をすることで、議論ができるようになります。自分の考えはこうでも、相手はこう出てくるに違いないなどと考えることができるようになるからです。また、人間関係の修復にもつながったり、視点を変えて考えてみると違うのかもしれないという考え方もできるようになります。

(説明の原則)

説明には必ずルールがあります。概要から詳細、全体から部分、あるいは大きい情報から小さい情報に向かって説明をしなければいけないということです。説明の原則がわかると、様々な事柄の説明が容易になるだけでなく、物の見方自体が変わってきます。日本でも説明の方法は教えていますが、時系列での説明の方法がほとんどです。初めにこれをやり、次にこれをやり、最後にこれをやりましたというものです。一方説明で難しいのは対象を空間的に把握して、その情報を言葉に落とすことなのです。

(クリティカル・シンキング)

クリティカル・シンキングを鍛える方法として、私は絵の分析と文章の分析を行っています。文章の分析からはじめようとする、文章の分析ができるようになる年齢という

のはある程度文章が読めるようになってからですので、小学校4、5年生以上ということになります。ところが、絵の分析でしたら3歳からできます。方法論は一緒です。そのため、短い時間の中で分析の手法を教えよとする場合、絵の分析から実施した方が効率がよいのです。

絵の中にある事実を証拠として挙げながら考えていく、それがクリティカル・シンキングの基本です。これができるようになると物の見方そのものが変わってきます。つまり、ぼんやり物を見なくなるのです。非常に注意深く物を見るようになります。それだけではなく、絵を鑑賞することもできるようになります。



絵の分析の指導を数回行うことで、中学3年生の生徒であっても、このミレーの絵を分析して、1,000字程度の文章を書けるようになります。次の例は、中学1年生から言語技術の訓練を実施した生徒たちに行った中学3年生の1学期の期末試験のものです。

1人目の分析です。「この絵の表現の特徴は2つある。1つ目は、目に飛び込んでくるような色をあまり使わず、暗め

の色をたくさん使っていることである。2つ目は、主として描かれているのは収穫をしている女性のはずなのにその女性の顔がまったくと言っていいほど描かれていないことである。このような特徴から、この絵は一所懸命に仕事をしていても社会的には光を浴びない女性たちのむなしさ、悲しみなどを見た人に訴えてくる絵だと言える。」次に、2人目の分析です。「絵の手前に来るに従い画面が暗くなっているのは、人々の身の上を表現している。後ろに行くに従い色が明るくなり、仕事が楽なものになる。明るく光が当たっている部分に描かれたのは社会の中程度の水準にいる人々。そして手前の最も暗いところにいるのは社会においてピラミッドの底辺にいる人々、すなわち奴隷、もしくはそれに準じたクラスの人々である。」。いずれも、中学校3年生の男子の文章です。1000字程度書かれた文章からの抜粋です。

タイトルを教えてしまうと物語の内容をほとんど半分以上を語ったことになってしまいますので、タイトルは教えません。実際この2人は、『落ち穂拾い』というタイトルを知らない状態で分析しています。文章の書き方と分析の仕方を教えることで、タイトルを教えなくとも、50分の試験時間の中で、自分で絵を分析して、さらに1,000字程度の文章を書くことができるようになります。初めてこの絵を見て分析したにもかかわらず、彼らは、実はある美術評論家が書いた内容とほぼ似たようなことを書いています。絵の分析は、分析力や論理力だけでなく、そういった面の感性も育ちます。その結果、美術館に行くのも楽しくなるのです。

文章でも同様に、具体的に証拠を挙げながら読んでいくことをクリティカル・リーディングと呼びますが、このような読み方をしているうちに生徒たちは、本の中から「絵が立



ち上がってくる」といいます。クリティカル・リーディングの対象は、詩、小説、長編小説、短編小説のほかに、戯曲、評論文、新聞記事など、あらゆるものが対象となります。日本では、論理的思考を育成する目的で、文学作品が減らされ、説明文、評論文が中心になっていますが、欧米は逆で、文学作品でこそ論理的な思考を育てるという方向です。

そしてもう1つ大事なのが、必ず本を丸ごと1冊読ませて議論させながら分析させるということです。自国の文学作品を尊重して、年に5～6冊を読ませていくのです。そうすることで、文化の理解と継承、人間と社会の理解、それから教養のある人間を形成することにつながります。なぜなら、文学作品の中にはあらゆる人間の状況が書き込まれていて、普通の人間の生活の中では経験できないことを文学作品の中でこそ経験できるからです。例えば今生きている子どもたちが戦争を経験するのは難しいですが、文学作品の中でならそれが経験できます。そのため言語技術実施国では非常に文学作品を大事にしています。

例えば扱う小説は、英語圏なら必ずシェークスピア、ドイツ語圏ならゲーテやシラーはもう絶対にやらなければいけないということになっています。

言語技術自体はすべての教科に絡んでいて、母語で指導した言葉の技術はあらゆる事柄の基礎力として働き、総合力のある人間を育てるというような組み立てになっているのです。